

# 「平家物語群読会」

## 新たな一貫教育の可能性を求めて

理工学部教授・コーディネーター 熊倉敬聡

小学校から大学までの一貫教育を謳っている慶應義塾。しかし、地理的・組織的隔たりゆえだろうか、(一部のサークル活動などを除き) 交流することも希な異年齢の塾生たち。今回の企画『平家物語群読会』は、そうした壁を乗り越えながら、新たな一貫教育、そして感動教育の可能性を模索する試みである。幼稚舎生、普通部生、志木高生、女子高生、そして大学生約 100 人が、先生方と協働して、“一つの” 群読会を作りあげた。

一昨年の初夏、国語の授業で実験的な群読を実践している先生がいるという噂を聞きつけ、初めて志木高の速水淳子先生にお会いした。そして、速水先生から、企画の趣旨にご賛同いただけそうな先生方をご紹介いただき、話し合っているうち、では、慶應義塾は一貫教育校なのだから、小学校から大学までのすべての学校に声をかけて、群読会をしてはどうか、という無謀な話へと発展していった。(今回は、上記の一貫校にとどまった。)

しかし、現実には、さまざまな困難があった。まず、それぞれの学校が、志木、三田、天現寺、日吉と離れているために、合同で練習することがはなはだ難しかった。結局、基本的には離れ離れで稽古をし、12月のただ一回の合同リハーサル、そして本番前のリハーサルのみで、本番に臨むことになった。

合同リハーサル。それぞれ同じテキストを練習していたとはいえ、互いに顔を、そして声を合わせるの、初めてである。全員舞台上上がり、まずは「壇浦合戦」冒頭の部分を読んでみる。もちろん、声の大きさ、速さはばらばらだ。先生方はうなった。だが、先生方の適切なアドバイスもあり、そして何よりも、互いに互いの声を聴きあいながら、二回三回と稽古を重ねていくうち、徐々に徐々に、声が揃いはじめ、ついには大きく豊かなユニゾンとなって、舞台そしてホール全体を満たしていった。その場に立ち会っていた関係者たちは、感動した。

そして、本番。今回は、大学生たちが舞台作りを担当してくれたが、彼らは、先生方そして生徒たちと直接やりとりしながら、道具・照明・音響・演出と縦横無尽に活躍してくれた。本番開始ぎりぎりまで、先生・学生・生徒間で微妙な調整が続いたが、やはり本番となると、皆気合いも違い、今までで最高の舞台になった。割れんばかりの拍手喝采だった。

年齢的にも地理的にも制度的にもふだんは離れ離れになっている塾生たち、彼らが『平家物語』の群読ということに触媒にして、最後には“一つの” 舞台を作りあげ、人々に感動を与え、しかも自分たちの深い経験となる。これこそ、一貫教育の醍醐味ではないだろうか。慶應義塾も、創立 150 年を間近に迎え、さまざまな試みがなされようとしている。外部にも、そして内部にもますます「開かれた」学塾を目指して、今まさに一貫教育校の真価が問われようとしているのではないだろうか。

## 幼稚舎における群読会への取り組み

古典作品の群読への取り組みは今年度で2回目である。昨年度は志木高生と一緒に古事記の群読に挑戦したが、古典作品など触れたこともない幼稚舎生にとって、それは大きな挑戦であった。だが、子どもたちはヤマトタケルの物語にすっかりのめり込み、志木高生の太い声に自分たちの声を重ね合わせることを純粋に楽しんで、「これはいける」というのが、その時の私の正直な感想だった。

今年度は普通部・女子高の参加もあり、4校で平家物語の群読ができることになった。小学校5年生に平家物語を教えることは簡単ではない。言葉が難しいことはもちろんだが、そもそもまだ歴史を習っていない子どもたちにとっては、「平家」「源氏」といったこと自体が未知の世界。つまり、平家物語の世界観自体が理解できないのだ。これを何とかかませるところから平家物語群読の指導は始まった。

幸い、去年はNHKの大河ドラマが『義経』だった。夏休み中に放映された「壇ノ浦合戦」の場面をビデオに録画しておいて教室で見せたのが非常に効果的であったように思う。そこから子どもたちは平家物語の世界にすっくと入っていったようだ。

いざ、その世界に入ってみると、平家物語は小学生の群読の教材としては実にぴったりのものであった。源平が雌雄を決するというストーリーのわかりやすさ、二位の尼が安徳天皇を抱いて入水する場面のドラマ性、合戦が終わった後の海に平家の赤旗が浮かぶ場面の色彩感。どれもが子どもたちの想像力を刺激してやまないものである。幼稚舎は最後の場面を担当させていただいたが、「主もなきむなしき舟は、潮にひかれ、風にしたがって、いづくをさすともなくゆられゆくこそ悲しけれ」と読む時、子どもたちの頭の中では、それぞれの壇ノ浦の海の情景が浮かんでいたのではないかと思う。

終わった後、子どもたちから聞いた感想で多かったのは、やはり中・高生の声の持つ魅力についてだった。自分たちでは絶対に出せない低い声や迫力のある声に、幼稚舎生は虜になっていた。中でも、女子高生が読む二位の尼の「浪の下にも都のさぶらふぞ」に感動したという声が多く聞かれたが、これは幼稚舎生がいかに中高生の声をよく聞いていたかという証でもあるわけで、担当者としては非常に嬉しいことであった。

昨年度に続いて速水先生と群読会をやらせていただけ

### 鈴木 秀樹

慶應義塾幼稚舎教諭。塾員（平5社修）。4<<年玉川大学文学部教育学科初等教育専攻卒業。<4年より現職。5333年にサウンド・エクスプローラ部を創設。「音を聴く」魅力を伝える教育を実践している。



たことは、大変嬉しく、また勉強になることであった。普通部の鈴木先生、女子高の喜多村先生とも、今回こうして一緒にお仕事をさせていただけたことは得難い機会であったと思う。演出を担当してくれた大学生の力にも感嘆した。我々、教員が演出を担当していたら、ああしたアイデアは出なかっただろう。

教養研究センターの方々には本当にお世話になり、感謝の言葉もない。慶應義塾は一貫教育を謳っているが、キャンパスが離れているせいもあって、一貫校同士が共同で何かを行うということが極端に少ない。それが今回、こうして実現できたのは、偏に教養研究センターの力あつてのことである。

ただ、逆説的な言い方になるが、教養研究センターの力がなければこうした会を実現できないというところが慶應義塾一貫教育の弱さでもある。この点を、今後、どう克服していくのかは、一貫教育校の教員である私にとっては大きな宿題となった。

### 生徒の視点から

2学期の10月頃から今日まで一所懸命練習してきました。幼稚舎生は中学生や高校生より読むリズムをゆっくりにしていたので、最初はバラバラで、すごくスピードの差がありましたが、今日はとてもうまく合いました。今日は練習の時よりスムーズかつ大きい声でセリフを言えたので、悔いは残っていません。普通部や志木高、女子高などが集まり、朗読発表会をやるという企画はめったにあるものではないので、おそらく一生の思い出になると思います。幼稚舎の高い声も良かったけれど、中高生の太くて低い声もよく通り、よかったです。またこのような企画があったらぜひ参加してみたいです。

## 普通部における群読会への取り組み

私が群読に出会ってから20年ほどになる。普通部で初めて群読に挑戦した子どもたちも今はもう30歳を過ぎただろう。当時、中学校段階の古典の授業を退屈でないものにするにはどうしたらいいのか、いろいろと考えていた。また一方、授業中発言をする時に、自分の声をきちんと他の人に届けさせようとしない子どもたちが多くいて、彼らに声を出させ、きちんと人に伝えるような訓練になる有効な方法はないかということも課題であった。そんな時に、学芸大学付属中の高橋俊三先生（後に群馬大教授）に出会って、群読という手法を教えていただいた。

以来「平家物語」中心に古典の学習時には、積極的に群読を取り入れてきた。それが縁あって志木高の速水淳子先生に伝わり、男子高校生ならではの力強い群読として花開き、さらには幼稚舎の鈴木秀樹先生に継承されて、今回の一貫教育校の挑戦に至る。また、女子高の喜多村隆先生も今回の企画に賛同され女子高生に声をかけてくださった。

普通部での群読は、5,6人で1班を作って、本文をどのように分けて読むか（分読）も班ごとに決めさせている。ここは一人で、ここは3人で、ここは全員で、というように。自分たちで決めて、自分たちで練習をして、最終的に人前で大きな声で読むところまでもっていくのである。中学一年生の1学期には「竹取物語」で群読を行った。今回の企画の平家物語は、その中学一年生の中から有志を募り9月以降週2回昼休みに練習を行なってきた。なぜなら放課後はそれぞれ部会活動があり、なかなか集まらないからだ。昼食を急いで食べてから、空いている部屋に集まって、あわただしく練習をするのは正直言って大変なことであった。

4校の塾生が一緒になるのは、合同練習会と本番だけだ。



### 鈴木 淑博

慶應義塾大学文学部卒業。現在慶應義塾普通部教諭。<4より<8年まで慶應義塾ニューヨーク学院(高等部)勤務。スペインで生まれた読書教育法「読書へのアニメーション」を各地で研究実践中。



それまでは各校それぞれに練習してきたわけだが、大変におもしろかったのは合同練習会の時である。各校の読むスピードが大きく異なっていたのだ。普通部生は12名という少人数だということもあったからだろうか、急ぐようなスピードで読んでいた。幼稚舎生は十分息を吸ってゆったりと読んでいた。群読はオーケストラの指揮者のような存在を置かないので、このスピードの違いを、お互いが聞きあって合わせようと、心を働かせ合うことに大きな意義があったと思う。

群読会に参加した普通部生は異口同音に、参加してよかったと言ってくれた。普通部生のこうした感想を聞くことができたのは、お世話になった各一貫校の皆さま、演出などでご活躍いただいた大学生、そして教養研究センターの皆さまのお力があったからこそだと思う。

### 生徒の視点から

「さる程に」(始まった。)心の中でそうつぶやいた。

僕たちは、数ヶ月にわたり練習してきた成果を今、出そうとしている。昼休みに二十分位を使って、読む練習をしたり、役を決めたりしてきた。僕は母に勧められて途中から入ったので、最初から入っている人たちよりも遅れを取っていたが、冬休みに少し練習したので、自信はあった。

僕はセリフは少ないが、一応ソロで言う場面があった。「子細にや及び候。」という言葉である。まだ声変わりをしていないため、低い声が出しにくい僕は、重々しく言うのに苦勞した。そこで僕は、できるだけ張りのある大きな声で言おうと心掛けた。

(佐藤壮一郎)

## 志木高における群読会への取り組み

志木高からは高校二年『国語表現』の授業一クラス、二十一名が群読会に参加した。志木高では現在『国語表現』の授業はこの人数で行っている。

今年速水の『国語表現』では一年間を通して朗読の授業を行った。一期は主に詩の朗読である。二期以降、今回の『平家物語』壇の浦合戦の群読練習に入った。約十回の授業を群読練習に充てている。夏休み直前に簡単に壇の浦合戦について説明、夏休みの宿題として嵐圭史『平家物語』全巻朗読テープの中から壇の浦合戦の部分を出るだけ真似をして読み、録音するという課題を出す。二期に入って台本を渡し、志木高の担当箇所を中心に読んでいった。まず読みの確認からである。さて今回の『平家物語』群読だが、国語科としての技能目標は「八百人のホールでマイクなしで十分に届く声で読む」というものである。発表の舞台である自尊館の収容人数が約八百人である。古典であるため、言葉の意味で補って聞いてもらうことはできない。耳で聞いて分かりにくい古文をはっきり届かせるためには、十分な声量とわかりやすい発音が必要だ。これを全員に対する目標とした。このため志木高生の台本には全員が一人読みを行う部分を設けた。毎回の授業はこの目標に向かって行われた。最初のうちは繰り返し読み、言い馴れない古典の口調に慣れること、リズムを身体で覚えることが中心である。その後は基本的には一人ずつ読んでもらうという形で進めた。十分に届く声ができるまで、何度でも繰り返し練習である。それらしく読むためではなく、思い切って声を出すための練習である。今年のクラスについては、比較的早い段階から全体としていい声が出ていたので、その点での苦勞といったものは少なかった。舞台を聞いてくださった方にはおわかりいただけたかと思うが、最終的にはすべての生徒が自尊



### 速水 淳子

慶應義塾志木高等学校国語科教諭。志木に来て十年目。古典朗読の授業を続けている。5333年45月三田世紀送迎会における「平家物語 木曾最期」群読、5336年4月アートセンター主催「生命を寿ぐ 高校生の声の力」。



館ホールの隅々まで響く声で自信を持って朗読を行うことができた。

授業は教室で行うことが多かったが、外で朗読することもあった。また今回は教養研究センターの記録のため、カメラマンが数度教室に来てくださった。演出担当の大学生がのぞきに来てくれたこともあった。そういうことが繰り返し練習の単調さを少し紛れさせてくれたのではないかと思う。

何と言っても、12月のリハーサルの経験が生徒たちには大きかった。リズムの違い、声の違いをはじめ多くのことを学んだように思う。教室という閉じた空間で決められたメンバーだけで行う授業では学べない多くのことがある。子どもたちが息を合わせ、声を合わせていく過程はなかなかドラマチックなものだった。この後、志木高の行事である「志木演説会」において群読を行い、志木高生たちに群読の一部を聞いて貰う機会を得た。そして、1月本番。

### 生徒の視点から

一つの言葉を読むのにもたくさんの読み方があることを知った。自分の読み方が他人の読み方とは違っていたり、違った声を重ねると声に味が出たりという経験をした。幼稚舎や普通部のようにまったく音程の違う人と一緒に声を出すと、それは「声」ではなく「音」となり、それが自分のところにはね返ってきて心地よかった。

群読を終えた今でも『平家物語』の内容をすべて理解したわけではない。言葉が違うからである。しかし言葉はよくわからなくても、それがきれいな音に聞こえ、風景がうっすらと浮かんでくるということがあった。昔の言葉は今の言葉とは違い耳に心地よく聞こえ、美しい流れがあり、一つの「芸術」という感じがした。

## 女子高における群読会への取り組み

今回の『平家物語』群読会に女子高も名を連ねた。それをして「参加」と大仰には言えないが、そこに至るには経緯がある。そもそもの始まりは、昨年5月下旬に幼稚舎の鈴木秀樹先生からかかってきた電話であった。それはいうまでもなく今回の群読会へのお誘いである。企画書もすぐに届いた。そこには志木高の速水淳子先生のお名前もあった。先生の群読に対する熱心な取り組みはつとに存じ上げている。実際に初めて接したのは世紀送迎会の折であったか。さらに普通部の鈴木淑博先生のお名前もある。アニメーション教育等を通して、旧知の間柄であり、私の尊敬している方のお一人だ。ついでのご縁を申し上げれば、『三田評論』の特集で鈴木秀樹先生と速水淳子先生が座談会に参加された号(2004-7)に、私の拙稿(『八十枚創作』余話)も掲載されている。第一、鈴木秀樹先生は愚息の担任であった方だ。これだけの包囲網の中で、『平家物語』群読への参加を断わる根拠も勇気も、私にはない。

さて女子高生の人選である。発表会等の時日からの制約で参加者は三年生に絞られるが、人材は豊富だという自信はある。〈音読〉は国語教育の根幹をなす一つの柱だ、と常に公言している。だが、その実践を女子高の授業時に行なうことには制約が伴う。授業を通して朗読の声を拾うだけでは狭い。しかし、幸いなことに女子高には環境がある。その一つが演劇会という学校行事だ。もちろん女子高生全員が舞台に立って台詞を言う機会があるわけではないが、それを含め教師の側に生徒の生の声を聞く機会はきわめて多い。他の国語科教員からの推薦もあった。そして池上・石田・石川の三君に声をかけ、快諾を得た。この人選には強い自負がある。この時点で、私の仕事の大半は終わった。

群読会に向けての教師の指導は特に何もしていない。台本を渡して彼女たちに任せた。彼女たちの声があればそれだけでよいと考えた。したがって女子高は他校のような「練習」と名のつくことをしたとは、到底言えない。まして「授業の一環」と名告るのはおこがましい限りである。それは、リハーサルで幼稚舎生の取り組んできたであろう姿勢に触れた時、その差異の思いは強まった。しかし、リハーサルから本番にかけて、彼女たちの力が更に昂まっていくことはわかっていた。それは場慣れといって適切でないなら、底力と言い換えてもいいものだ。そして大急ぎで付け加えるが、彼女たちが努力をしなかったわけ

### 喜多村 隆

慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。  
4<3年より慶應義塾女子高等学校教員(国語科)  
となり、現在に至る。



では決してない。ただ、彼女たちの声は主張すべき時に躊躇しない。周囲への協調性もある。気を読む洞察力もある。過たずに実力を発揮する場面を何度も見てきた経験から来る、私の信頼だ。さて、本番である。各年代の声調に高校生の女声加わったことで群読に色彩を与えることができたのではないかと密かに思っている。さまざまな声重なることの美しさ。最後に、もしこの会に成功という荣誉が冠せられ、その要因の一つだけ挙げよと問われたら、それは速水先生の台本のよさに尽きると即答できる。敢えて申し上げるまでもないことだろうが、ここにことばとして示しておきたい。

### 生徒の視点から

「さる程に源平の陣のあはひ、海のおもて卅余町をぞへだてたる……」

凜とした、八十人の声。一人ひとりが物語世界の一人となり、迫りに満ちた声を響かせる。自尊館が、壇ノ浦になる。

腹の底から出された八十人の声がぴたりと合うことは、最高に気持ちが良い。とは雖も、初めから揃っていたわけではない。大学生の指導のもと、上級生は下級生に、下級生は上級生に合わせようと懸命に努力した。何度も何度も相手の声を聞き、ペースをつかみ、自分たちの声を重ねてみる。少しずつ、八十人の声を一つにしていく。一貫教育校生として互いを思いやる気持ちが、この群読会の成功には不可欠であった。

普段接することのない学年と一つの目標に向かう……。慶應義塾ならではの、有意義かつ得難い体験だった。

(池上桃子)

## 舞台裏から——大学生として群読会に参加して

この活動を通して、慶應義塾の一貫教育に対して熱い想いを持っている多くの先生方と出会えたことを何よりも嬉しく思いました。また、このような先生方とお話する機会を持って、慶應義塾の学生として、慶應義塾という組織を客観的に見つめ直し考えることができる良いきっかけができたと思います。今回は主に慶應義塾内部での活動になりましたが、このような活動を外部にも発信し、今後もっと広めていくべきだと感じています。(小川奈夏)

素晴らしい本番でした。一堂に会するリハーサルは当日以前には12月に1度のみ。それぞれ成長における重要な岐路にいる彼らが個々の積み重ねを元に、本番当日限られた時間内で加速度的に調和を得ていった。

その光景を目の当たりにできたことは、スタッフ参加した自分にも貴重な経験となりました。また、私自身志木高生の時に速水先生から群読の指導を受けた一人であり、その意味でも贅沢な機会でした。ありがとうございました。(滝山聖士)

無軌道な子供達と冒険的な大人達と真面目な大学生の饗宴はこれ以上に無くエネルギーで、作品としてはマクドナルドのハンバーガーみたいに現代的な軽薄さに満ちあふれた最高のトラッシュ感満載、再現性ゼロ、空前絶後の体験は全てがとっってもフレッシュでした。(谷川俊樹)

普段、大学にいると大学生と接することに時間の大半が使われてしまいます。幼稚舎・普通部・女子高・志木高の生徒さんには、自分の小中高時代の考え方や、感じ方を思い出させてもらいました。

また、自分は大学から慶應義塾に入り、小中高は福島県の公立校で過ごしたので、都心育ちの友達とは考え方のギャップを感じることも多いのですが、皆さんと話してみて、考え方の育成がどのように進むのかを身近に感じ考えられたことも、これからの出会いに生かしていきたいと思います。(山澤大輔)

## 「平家物語群読会」に参加して

### 「キャンパスを繋ぐ読み声に拍手」

幼稚舎長 福川忠昭

幼稚舎生から高校生まで80名の平家物語を読み上げる声が自尊館に響き渡り、見事な群読が始まりました。“鶏合壇浦合戦”では、普通部生や高校生に混じって幼稚舎生が、声を揃えて一生懸命に読み進めていきましたし、語り継いでいく話の受け渡しも澁みなく、しっかりとした大きな声で話していました。また“先帝身投”と“内侍所都入”では、声の調子や語り口、それに話す速さを変えるなど、聴き手の人達を物語の世界に見事に引き込んでいきました。語られた物語の内容は悲しいものですが、聴いていて思わず嬉しくなっていました。

幼稚舎生から裏方を務めた大学生までが、協働して一つの作品を群読するという、一貫校ならではの交流の機会でしたが、一貫校とはいってもそれぞれのキャンパスが離れていますし、主要な学校行事の日程も違いますから、今回の公演は想像以上に大変なことだったと思います。企画され、実施にまでこぎつけられた関係諸先生方のご尽力に敬意を表しますとともに、こうした交流の機会をもっと広げる努力が必要ではないかと思います。

### 「群れて読むことの楽しさ」

文学部教授 鷲見洋一

たった25分の時間に、いろいろなものが一杯詰まったかけがえのない体験をさせて貰いました。まず、日頃「一貫教育」を謳いながら、同じ生徒が下から上に進むという客観的現実以外に、実はさほど「一貫」しているとは言い難い義塾の仕組みに、大きな風穴をあける試みだったことを高く評価したい。小中高の3層におよぶ世代が一堂に会して何かをするというだけでも、これは世界に類例がありませんが、さらに、これだけの年齢幅を揃えた発声からは、何とも玄妙なハーモニーが生まれます。聴衆の耳には得難い刺激でしたし、生徒達にとってもお互い同士が聴き合うという貴重な共生体験だったはず。幼稚舎生や女子高校生の清らかな声音もさることながら、平家物語の文学的内容を知り尽くした上で朗々と響かせた男子高校生の語りに、痺れました。

慶應義塾大学教養研究センター Report No.13  
交流・連携セクション(担当: 田上電也)

2006年3月31日発行

代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL: 045-563-1111 (代表)

lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/